は法則だ。誰に命令されたわけでもないのに、X氏は、そう思い、そう信じ込んだ。
雨傘の柄が左手のなかでつるつる滑った。X氏は、自分のしていることが、何であるのかわかっていた。
X氏は歩く。ビッグ・バンの風の音をききながら。無数の電子たちの音楽が流れている。ビッグ・バンの風の流れまでが、X氏の眼には、はっきりと映った。
身体はひとつの点だった。
踏んでみろ、跨いでみろ、たかだか白線じゃないか。阿呆め、まったく馬鹿げている。何も起こりはしない。いや、すべてが、すでに起こってしまっている。何度もきいた声だ。誰の声だ。自分が一番よく知っている声なのに、どうしても、その声の主が思いだせない。簡単な、単純な、誰もが毎日きいている声だ。
誰だ？　何者だ？　見ている者もいない。いや、見られても平気だ。罪でも罰でもない。自然の行為だ。毎日、無数の白線を足たちは踏んでいる。白線を踏みたいだろう。白線を跨ぎたいだろう。何をびくびくしている。最高の快楽・法悦があるというのに。
X氏の眼は、夏の光のなかで、鳶色に光り輝やいていた。
わかっている。何が？　白線を跨ぐということがいったいどういうことなのか。で、どうする気だい？　自分は、ただ、白線の左側を歩きたいだけなのだ。そして、そうしている。

それがどういうことなのか、どうでもいいのだ。それがいいことかわるいことか、そんなこと、なおさら、どうでもいいのだ。もう、うんざりだ。黙っていてくれ。口を出さないでくれ。命令しないでくれ。強制しないでくれ。すべてが、自分の責任だ。もう、誰の声にも耳を傾けたくはないのだ。さんざん聴き飽きた声ばかりだ。忠告もいらない。何千回も考えたことだ。決して、誰にも負けない。その先、どうなろうと、俺の知ったことか。わかっている。眼にはすべてが見えている。俺は、未来を想いだしているところなんだ。
X氏の眼には風景が透けて見えた。
光のつくった影たちが実物よりもくっきりと存在していた。X氏本人よりも、X氏の影の方が強く存在している。奇妙だが事実だ。夏をもっとも待ち望んでいたものは、影たちだった。
X氏の眼のなかに、ゆれるもうひとつの影が映った。
影は白線の右側にあった。光のなかに髪がゆれている。赤い髪だ。X氏は、まだ、人の顔も見わけがつかぬ距離で歩いてくる人物が誰であるのか見抜いていた。いや、そのことを知っていた。未来を想いだしていた。あの女だ。赤い髪の、あの店の女だ。日曜日、いつも見ている例の女だ。会話らしい会話もろくにしたことがないくせに、自分が一番よく知っていると思っている女だ。平凡で、どこにでもいる、ただ働いている女。X氏は、赤い髪の女の顔に刻まれた表情なら、すべて知っていると思う。女は、X氏の頭のなかで生きている。呼吸をしている。昂ぶりが来た。